この子を学級の核にして・・・！

ずいぶん以前になりますが、ある保護者の方から、こんな話を聞いたことがあります。

『私たち夫婦には、障がいがある子がいます。わが子に障がいがあると知ったとき、それはどうしょうもないくらいに悲しみました。なぜ、私たちに障がいのある子が生まれてくるのだろうか・・・。どうしたら、この障がいをとりのぞけるのだろうか・・・。

神仏にもすがりました。あちらこちらの病院にも行きました。でも、けっきょく、わが子の障がいをとりのぞくことはできませんでした。最後には、この子と一緒に死のうとも思いました。

ところが、考えなおしてみると、「この子は、私たち夫婦だから生まれてきたのだ、他の人には育ててもらえることができないから、私たち夫婦がさずかったのだ。と、思うようになりました。すると、わが子の障がいがあたりまえのようになり、この子と一緒に生きていくことが、私たち夫婦の使命なのだと思えてきました。今は、わが子に教えられることばかりです。」と、話しておられました。』

今は、このように言われていますが、今日までの、このご夫婦の苦労ははかり知ることができません。でも、このご夫婦は、わが子の障がいを“あたりまえ”のこととして感じられたからこそ、今日があるのだと思います。

学級の子どもたちの中には、話を聞かない子・友だちとけんかをする子・すぐ暴力をふるう子・学力に不安のある子・友だちと遊べない子・いじわるをする子・教室に入れない子・・・・などなど、いろいろな子がいます。

中には、「この子が他の学級だったらいいのになあ！」とさえ思う子もいます。（私も、そう思ってしまった時がありました・・・）

でも、今、ふりかえれば、そう思われた子は、どれだけ悲しい思いをしていたことでしょうか。また、そう思われることは、一度や二度だけではなかったでしょうし、一人や二人からではなかったのではないでしょうか。

それよりも、「この子が私の学級にいるのは、私だからこそなのだ。きっと、学級の仲間作りの核になる子なんだし、学級の仲間に多くのことを教えてくれる子になるのだ。」と思えば、きっと何かができるはずだと思います。

その子を学級の中心にすえてみませんか！　教師が動きだせば、きっと子どもたちが動いてくれます。子どもたちが動きだせば、学級が動きだします。そして、そんなふうにして過ごした学級や仲間は、一生涯忘れることができないものになることと思います。

よく言われる、「子どもをまるごと受けとめて」とは、子の現状を直視し、子どもも教師も共に悩み共に努力し、新たな一歩を歩み出すことだと思います。